

平成21年5月10日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2006～2009  
課題番号：18560627  
研究課題名（和文） 中央ヨーロッパの木造架構における棟持柱構造の原形と変容に関する形態史的研究  
研究課題名（英文） A morphological study on origin and transformation of ridge-supporting post in the central European wooden structure  
研究代表者  
土本 俊和（TSUCHIMOTO TOSHIKAZU）  
信州大学・工学部・教授  
研究者番号：60247327

研究分野：建築形態史

科研費の分科・細目：建築学 建築史・意匠

キーワード：民家、棟持柱、掘立柱、木造、野外博物館、ドイツ、イタリア、スイス

## 1. 研究計画の概要

（1）本研究は、木造架構における棟持柱構造の原形と変容を形態史的な観点から考察するものである。これまでの日本の知見を踏まえた上で、中央ヨーロッパとの差異を抽出しつつ、中央ヨーロッパの原形と変容を木造架構における棟持柱構造について、明らかにすることを目的とする。

（2）中央ヨーロッパの事例を収集するために、建築遺構、考古学的発掘資料、絵画資料、文献資料を渉猟する。

（3）また、中央ヨーロッパの事例を収集するために、南ドイツ、オーストリア、北イタリア、スイス、フランスといった地域のフィールド調査を実施する。

## 2. 研究の進捗状況

（1）考古学的発掘の成果を報告した文献を渉猟した結果、中央ヨーロッパにおいても棟持柱構造を木造架構の祖形と位置付け得る点を把握した。特に、先史時代の事例を復元した野外博物館を実見した点、おなじく千四時台の事例をミニチュア模型で復元した研究成果を考古学博物館で実見した点は、大きな成果であった。

（2）先史時代の絵画資料として、天然の岩の表面に凹刻の線描にて建物の形態を示した事例を実見した点は、大きな成果であった。これにより、考古学的発掘では十分に捕捉できない立面と断面の形態を把握することができた。

（3）以上に加えて、建築遺構を実見することができた点も、やはり大きな成果であった。南ドイツ、オーストリア、スイスに関しては、棟持柱構造をもつ建築遺構を数多く捕捉し

た。これにより、棟持柱構造をもつ建築遺構について、中央ヨーロッパにおける地域的分布の概略を把握した。地域的分布については、野外博物館に移築復元されている建築遺構を参照した上、その建築遺構が実際に立地していた地域を把握するといった基礎的な考察からはじめ、列車やバスなどを用いて建築遺構を広域で概観していく作業を踏まえつつ、詳細を把握しつつある。

（4）原形から変容に至る時系列上の流れのなかでは、ファッハベルクバウ Fachwerkbau を呼ばれる木造建物が完成形である点を把握している。この完成形に至るまでの形態変遷について複数の道筋を作業仮説として設定するに至っている。

（5）これまでの最大の蓄積は日本の木造架構に即した棟持柱構造の蓄積である。現段階では、日本と中央ヨーロッパの差異を学術的に厳密に指し示すことができる点に達している。

## 3. 現在までの達成度

## ③やや遅れている

(理由)

研究代表者は、これまで日本の建築を対照に研究を進めてきており、数多くの成果をあげてきた。この点には自負もある。今回は、対象をヨーロッパに広げ、日欧の比較までも視野に含めた研究計画を立てた。この研究計画に対して、現在までの達成度は、やや遅れている、という評価を自ら下したいと思う。

主な理由は、ドイツ語やイタリア語での文献に目を通すことに費やす労力による。日本語での文献とくらべれば、難易度が格段に異なるからである。やや遅れている最大の理由

は言葉の問題にある。対して、フィールド調査に関しては、研究計画を立案していた頃より遙かに豊富な成果をあげることができている。日本を対象とした、これまで蓄積してきた研究成果を重ねていけば、中央ヨーロッパに即した実証的な知見も確実にまとめ上げることができる。進捗状況は遅れているものの、研究はゴールに向かって進んでいる、と評価したい。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 研究テーマに即した先行研究について、これまで渉猟してきたものを整理して、論点をまとめ上げる。

(2) フィールド調査を通じて収集した事例の整理を行い、その建築的な特徴を抽出し、原形と変容の観点から考察をまとめ上げる。

(3) 中央ヨーロッパの全貌を捕捉する作業を文献調査とフィールド調査の双方から進めていく。

(4) ドイツ語、イタリア語といった語学上の問題はいまあらためて語学力アップを日々の努力とする点を対策とし、文献購読に努めたい。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 土本俊和、坂牛卓、早見洋平、梅干野成央、京マチヤの原形・変容・伝播に関する研究-建物先行型論と棟持柱祖形論にもとづく建築コラージュ形態史論-、住宅総合研究財団 住宅総合研究財団研究論文集、34、161-172頁、2008、査読有
- ② 土本俊和、民家のなかの棟持柱、民俗建築、131、102-112頁、2007、査読無
- ③ 島崎広史、土本俊和、棟持柱構造と軸部・小屋組構造を併せ持つ切妻小規模建造物、日本建築学会計画系論文集、603、175-182頁、2006、査読有
- ④ 土本俊和、文化的景観の保全と民家・集落の今後のあり方、民俗建築、130、90-91頁、2006、査読無
- ⑤ 滝澤秀人、島崎広史、土本俊和、遠藤由樹、ウダツと大黒柱-切妻民家の中央柱列における棟持柱の建築的差異-、日本建築学会計画系論文集、604、151-158頁、2006、査読有

[学会発表] (計4件)

- ① 土本俊和、民家保存再生の展開過程-日本における規制と法律に即して-、ワークショップ Rehabilitation for Japanese Commoner's House, The National Folk Museum of Korea, September 7-8, 2006

[図書] (計1件)

- ① 土本俊和、京マチヤの原形ならびに形態生成、西山良平編、平安京の住まい、京都大学学術出版会、195-241頁、2007